

| | | | |
|---------------|--------------------------------|------|-------------|
| 派遣者番号 | 29K01 | 氏名 | 山ノ内 暁人 |
| 研究主題 —副主題— | 通常の学級と特別支援学級における交流及び共同学習の現状と課題 | | |
| 派遣先 | 創価大学教職大学院 | 担当教官 | 吉川 成司・長島 明純 |
| 所属校 | 新宿区立東戸山小学校 | 校長 | 川崎 勝久 |

キーワード：交流及び共同学習 特別支援学級 インタビュー 障害理解教育

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

交流及び共同学習の教育的意義は、『特別支援学校学習指導要領解説総則編等小学部・中学部』によれば、「特別支援学校や小・中学校等が、それぞれの学校の教育課程に位置付けて、障害のある者とない者が、共に活動する交流及び共同学習は、障害のある児童生徒の経験を広め、社会性を養い、豊かな人間性を育てる上で、大きな意義を有しているとともに、双方の児童生徒にとって、意義深い教育活動であることが明らかになってきている」ことが明記されている。

従来の交流教育が行われてきた2004年以前から、名称が変更となった交流及び共同学習に関する研究は数多く報告がなされており、アンケートによる実態調査や、交流後の子供の変容などの成果が報告されている。しかし一方では、多くの課題も述べられている。

遠藤・佐藤(2012)によると、本来は、「特別支援学級だけでは補いきれない目的・内容・手だてがある」としながらも、特別支援学級担任が交流の目的として、「子供に期待することは何なのか」、それを「具現化する手だては何なのか」というような交流の目的と手だての再確認が必要だと指摘している。

そこで、本研究では、小学校特別支援学級（知的障害）の学級担任に焦点を当て、インタビュー調査を通して、教育現場における取組や、学級担任の交流及び共同学習に対する意識・思いの側面から、現状と課題を明らかにするとともに、今後の交流及び共同学習の在り方について検討することにした。

2 研究の内容・研究の方法

(1) インタビュー調査と分析

① 調査対象

対象者は、首都圏の小学校に勤務する5名の特別支援学級担任とした。

（男性1名、女性4名）

② 調査データ収集時期 2017年7月、8月

③ 面接調査の形態

面接調査は、調査協力者である特別支援学級担任との1対1で実施し、半構造化面接で行った。

④ 面接調査の主な質問内容

- ア. 交流及び共同学習で大切だと考えるねらいはどのようなものがありますか。
- イ. 交流及び共同学習を進めていく上で課題だと感じていることはありますか。
- ウ. 通常の学級と特別支援学級の子供同士のどのような姿を理想としていますか。
- エ. 今後、充実した交流及び共同学習を進めていく上で、ご意見や具体的なアドバイスをいただければお聞かせ下さい。

(2) インタビュー調査の分析方法

データ分析は質的研究で多く使われている修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(木下2007)を参考にして以下のとおり実施した。

① 意味のまとまりに分けコード名をつける

データの分析は、まず調査協力者ごとにインタビューの逐語録を作成し、ポイントになる語りに対して内容を簡潔で適切な言葉（コード）にまとめた。

② コードの内容をサブカテゴリー化する

コードの内容を意味のまとまりごとに分類し、サブカテゴリー名を付けた(表1)。

③ サブカテゴリーの内容を分類しカテゴリー、コアカテゴリーを生成する

サブカテゴリーの内容を意味のまとまりごとに分類し、(コア)カテゴリーを生成した。

④ サブカテゴリー及びカテゴリー間の関連を考え、ストーリーラインを作成する

サブカテゴリー及びカテゴリー間の関連を考え、ストーリーラインを文章化する。

3 研究の結果

分析の結果、9カテゴリーと34のサブカテゴリーが生成された(図1)。これらの関連を基に特別支援学級担任が考える交流及び共同学習(以下、「交流」)の現状と課題について、以下に提示する。

表1 カテゴリーとサブカテゴリー例

| カテゴリー | サブカテゴリー |
|-------|---------------|
| 躊躇 | 関わりの方向付けへの躊躇 |
| | 送り出しへの不安・ためらい |
| | 積極的な交流にならない |
| | 形だけの交流に対する抵抗感 |

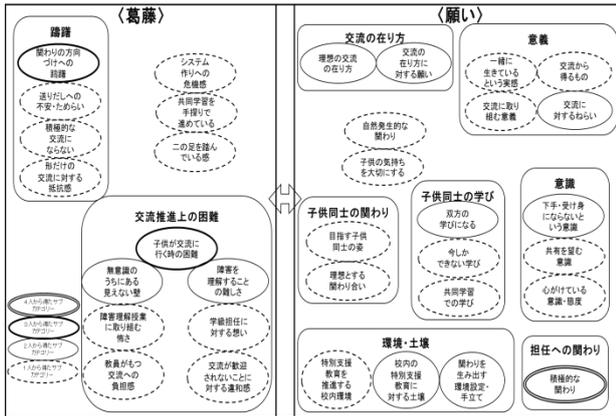


図1 サブカテゴリーの結果図

学校内において、特別支援学級担任は通常の学級担任と共有したい、あるいは特別支援学級担任として交流を心がけたい、という意識をもちながら積極的な関わりを日頃から重ね、通常

の学級担任との人間関係づくりに努めていた。

また、交流に対しての意義や理想とする子供同士の関わりの姿など、明確な考えをもっていた。それらの願いとともに、交流に取り組む学校全体の環境・土壌が交流を推進していく上で非常に重要であることが明らかになった。

しかし、目指す子供同士の学びや交流の在り方に対する考えや思いを抱きながらも、一方では、子供たちを送り出すときに感じる躊躇や、交流推進上の困難など、様々な葛藤を抱えていることも明らかになった。

特別支援学級担任は、このような願いと葛藤の二つの思いが、互いに拮抗している中で交流に取り組んでいることが分かった。

4 研究の考察

特別支援学級担任(5名)へのインタビューを通して、課題として挙げられることは、交流場面や活動を設定していく上での難しさや、子供たちの関わり合いが深まらないこと、あるいは子供たちが交流に行くときの困難さがある。

一方で、子供たち同士が自然に関わり合いをもち、互いの理解を少しでも進めたいという思いをもって、実践に取り組んでいることも明らかになった。

本研究を通して、小学校現場における交流及び共同学習推進のための、今後の展開の方向性として、通常の学級と特別支援学級担任間での「交流に対するねらいや、目指す子供同士の具体的な姿の共有」や「校内システムの整備」や「子供同士の、個のつながりを意識した活動内容の積み上げ」などが必要だと考える。

5 今後の展望

今後は、通常の学級担任へのインタビュー調査結果との比較や、特別支援教育に携わってきた経験歴の異なる教員の意識などの視点から、研究・考察を深めていきたい。